

Title	ステファヌ・マラルメ「ゴシップ1875-1876」『アシニーム』(2)(翻訳)
Sub Title	Stéphane Mallarmé : "Gossips 1875-1876", Athenaeum (2) (traduction)
Author	Mallarmé, Stéphane(Harayama, Shigenobu) 原山, 重信
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.53 (2011. 9) ,p.27- 34
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20110930-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ステファヌ・マラルメ
 「ゴシップ 1875-1876」『アシニーム』(2)
 (翻訳)

原 山 重 信

承前

6. 1875年11月7日 — 1875年11月13日

文学ゴシップ¹⁾

II (b) 最近からパリにある数少ない文学新聞の一つに、『文学生活²⁾』がある。これは最も好奇心をそそられる状況に発行され、現世代の際立ったあらゆる人物の散文と韻文を毎週受け取るという幸運に恵まれている。1864年から1865年にかけて、当時の若手の集う場所であり、これまでであった中で最良の文芸誌の一つであった『新評論』誌はこのようにして出版されていた。だが特別な事情でその活動の只中に廃刊を余儀なくされた³⁾。コリニョン氏は今や引退生活から脱している。その間彼は『スタンダールの芸術と人生』と『ディドロ』という二大作を書いていたのだ。かつての寄稿者たち全員の力を借りたが、その大多数は一つの業績を成し遂げるか、名声を得ていた⁴⁾。10年の歳月を隔てて、同じ文書が現れ、中断された芸術、文学の宣伝作品が継続されるだろう。前時代の人々も『文学生活』に参画している。創刊号にはサント＝ブーヴとテーヌの未刊作品が載るのである。

★

(c) ジュール・クラルシー (彼の『ミュスカダン』という戯曲が成功裡に幕を閉じたばかりで、『9月4日の歴史』が近々現代まで続けられるだろう)

による『J.-B. カルポー (1827-1875)』という表題で、最近〈フランス芸術〉に推挙された偉大な芸術家の生涯が、目下刊行されている⁵⁾。この種の事柄に最も強い人物の一人のお蔭で、このとても小さな書は、感動的で、断定的なページの数々の傍らで、カルポーの業績を研究するのに資する殆ど全ての材料、とりわけ彼の作品の正確な目録を提供してくれている。

- 1) 『アシニアム』1875年11月13日土曜日、「文学ゴシップ」、p. 642-643を見よ。英文テキスト、後出、p. 83。—1875年11月14日日曜日のコリニオン宛書簡の中で、マラルメは『文学生活』に関する段落を「今週」送ったと述べている。
- 2) 『文学生活』は、1875年から1878年まで、二つ折の大判で刊行された。
- 3) マラルメは勘違いをしている。『新評論』は1863年と1864年に出ている。
- 4) アルベール＝マリー・コリニオン (1839-1922)。メッツ、次いでパリ弁護士会所属の弁護士。ジャーナリスト、自由評論家。彼のスタンダールに関する著作は、G. バイイエール社から1868年に、『デイドロ、その生涯と作品』は民主文庫書房より1875年に刊行。S. マラルメ『書簡集 1862-1871』、パリ、ガリマール社、1959年、p. 98, 109, 113, 119を見よ。
- 5) ジュール・クラルシー (1840-1913) 小説家、劇作家。1885年から1913年までコメディエール・フランセーズ支配人。彼のカルポーに関する著作は、函解書房より1875年に、『1870-1871年の革命史』2巻本は蝕局より1872-1875年に刊行。5幕8景の正劇『ミュスカダン』は、1875年9月16日に歴史劇場にて初演され、同年ダンテュ社より刊行。—1875年6月5日土曜日の書簡の中で、マラルメはマラルメ訳、マネ挿絵のポー『大鴉』をクラルシーに1部献呈し、どこかでこの作品を告知してくれるよう依頼している。クラルシーは、当時『フィガロ』紙のコラムを担当していた。多作の雑文家で、後に『文芸共和国』誌に寄稿する。

7. 1875年11月13日 — 1875年11月20日

文学ゴシップ¹⁾

Ⅲ (a) 最近刊行されたものとして、ミシュレの『19世紀の歴史』の第2巻、第3巻の公刊をお知らせしよう。同書はこの天才の死²⁾によって中断していた。第1巻は「ボナパルト家の起源³⁾」であった。第2巻、第3巻は、「ブリュメール18日まで」と「ワーテルローまで」と名づけられている。これらの巻は、『フランス史』、『フランス革命史⁴⁾』の名で凡そ20世紀に互って

展開される近代の大きな周期を、あまりにも早く閉じてしまう。——どれほど親しい友情が、ミシュレをエドガール・キネーに結び付けていたかは、人の知るところだ。キネー夫人は、夫の偉大な遺作⁵⁾の校正刷りを直しており、キネーに関しては、ルイーズ・コレ夫人〔ママ^{a)}〕も目下伝記的研究⁶⁾を印刷させている。

(d) パリのシーズンの初めに大挙して現れた出版物、この冬の間ずっと消えない筈だと思われる作品に以下のものがある。小説ではアルセヌ・ウーセーの『ダイアナたちとヴィーナスたち』。これは一方、彼の『パリの千夜一夜⁷⁾』の第4巻でもある。『ヤゲルマギク』、カルポーによるカバーに描かれたこの花（恐らく彼の最後の作品）とジョルジュ・サンドの序文の付いたのは、ギュスターヴ・アレルの作品である。これは社交界の女性、ギュスターヴ・フウ夫人⁸⁾の名を隠す偽名である。シャンフルーリのエスプリとユーモアに富んだ本物の書『学術喜劇⁹⁾』。最後に、ロベール・アルト¹⁰⁾の『ベアトリックスの物語』とエクトール・マロ¹¹⁾の『世界の旅籠屋』のうちのこの巻、『チェンバレン大佐』である。家族の文学としては、ポーリーヌ・L…、即ちルイ・ユルバック夫人¹²⁾の『母親の書』。この女性は知られた作家の妻であり、その一部は、この冬、『フィガロ』紙に発表された。

- 1) 『アシニアム』1875年11月20日土曜日、「文学ゴシップ」、p. 675を見よ。英文テキスト、後出、p. 85.
- 2) ミシュレは1874年2月9日に亡くなった。
- 3) この巻「総裁政府、ボナパルト家の起源」は、G. バイイェール社から1872年に刊行。他の2巻はミッシェル・レヴィ兄弟社より1875年に刊行された。
- 4) 『フランス史』は、17巻で1833年から1867年まで刊行。『フランス革命史』は、7巻で1847年から1853まで刊行された。
- 5) 1875年11月21日の書簡の中で、マラルメはオショネシーに問題の書は『亡命者の書』と題されているとはっきり知らせ、その「序文」を彼に送っている。この詳細は、1875年11月27日の『アシニアム』の「文学ゴシップ」、p. 710に掲載された。
- 6) フローベールの〈ミュージズ〉、ルイーズ・コレ（1810-1876）のことである。ルイーズ・コレ『エドガール・キネー、新しい精神』、パリ、ユルト社、1876年、

in-16, 33p.

- 7) アルセーヌ・ウーサー (1815–1896)。文人、コメディイ・フランセーズの支配人。とりわけ今日では、『告白』と『アカデミー・フランセーズの41番目の椅子の歴史』で知られる。『ダイアナたちとヴィーナスたち』はミッシェル・レヴィ兄弟社より刊行。『パリの千夜一夜』はダンテュ社から刊行された。4巻、in-8°。ボードレールの『パリの憂鬱』の献呈を受けた人であり、マラルメが1862年に「悪運」、「鐘つき男」と、論考「芸術の異端、万人のための芸術」を發表した『芸術家』誌の編集長であった。
- 8) 喜劇役者ヴァレリー嬢こと、ウィレルミーヌ・ジョゼフィーヌ・シモナンは、ナポレオン3世の大臣の息子ギュスターヴ・フウ (1836–1884) と結婚し、ギュスターヴ・アレルのペンネームで女流文学者に復歸していた。『ヤグルマギク』は、ミッシェル・レヴィ兄弟社より刊行された。
- 9) シャルパンティエ社刊行、第3版のことである。初版はラクロワ、ヴェルベックホーヴァン社から1867年に刊行。—フルーリ、シャンフルーリこと、ジュール・ユソン (1821–1889)。リアリズム作家にしてカリカチュアの歴史家。
- 10) ロベール・アルト (1837–?) はルイ・シャルル・ヴィウの偽名である。『ペアトリックスの物語』はダンテュ社から刊行された。後に『文芸共和国』に寄稿。
- 11) エクトール・マロ (1830–1907)。『家なき子』(1878) とその他多くの礼儀正しい作品の作者。『世界の旅籠屋』はダンテュ社から刊行された。全4巻からなり、『チェンバレン大佐』はその第1巻である。
- 12) ルイ・ユルバック (1822–1889)。数多くの小説の作家であり、『フェルネル夫妻』(1860) はベストセラーとなった。
- a) コレの綴りを、マラルメは 'Collet' と記しているが、正しくは 'Colet' である。よって、原著に [ママ] とある。

8. 1875年11月13日 — 1875年11月20日

文学ゴシップ¹⁾

Ⅲ (e) 青年時代の作品と長い間未刊であった書きものを収めたバルザックの壮大な版に続いて、この大小説家の『書簡集』が上梓されるはずである。現在、あらゆる書簡、興味深い書類を持つ国内外の所有者に最後の呼びかけをしているところである。これらの作品或いはその本物の写しは、ミッシェル・レヴィ兄弟出版社へ送らなければならないだろう。



(c) よく知られた研究家にして愛好家で、国立図書館の司書であるアドルフ・ラビット氏のもとの、既にここで予告済みの³⁾『ヴァテック』のフランス語原文が(ステファヌ・マラルメ氏の〈序文〉を付して)まもなく出版されることになっているが、この人物が12月20日から、『我が図書館』という刺激的な表題で月報を出すはずである。彼の手を通るあらゆる高価な書物の生きた学術的目録であり、これこそまさにヨーロッパの愛書家がこの教養人から期待し得るものである。



(b) 常に現世代の先頭に立ち、運動を起こしていたようだった若きフランス詩人にして、『現代高踏派詩集』の創始者のカチュール・マンデス氏が、この冬、叙事詩、抒情詩作品、1863年から1875年にかけての作品を含む第一段階の大決定版を上梓しようとしている⁴⁾。一時代を画するこの書は、依然未完の超自然的で、北方の詩、『真夜中の太陽』、それから出世作だが残部僅少となった『フィロメラ』、そして最後に最近刊行されたが、既にめったに見掛けない『叙事詩的物語』と『エスペリュス』を収めるだろう。その前に文学雑誌・新聞の読者に知られている2つの文集『セレナーデ』と『物悲しい夕べ』が置かれる。

- 1) 『アシニアム』1875年11月20日土曜日、「文学ゴシップ」、p.675を見よ。英文テキスト、後出、p.85.
- 2) 『書簡集(1819-1850)』は『バルザック全集』、ミッシェル・レヴィ兄弟社、全24巻、in-8°, 1869-1876年の第24巻になった。
- 3) 『ヴァテック』が『アシニアム』の「文学ゴシップ」の中で紹介されたのは、フローベールの『ブヴァールとペキュシェ』と同時(もう!)で、1875年9月4日のことであった(後出、p.80を見よ)。マラルメがこうして丁重な言葉を綴っているにも拘らず、ラビットは国立図書館へ収めた『ヴァテック』の刊本に次のような注記を書き込んだ。「序文はまやかしであることを読者に告げつつ、私はこの刊本を国立図書館に収める。」(『全集』〔旧版〕、1956年、p.1601.)
- 4) マラルメがカチュール・マンデスに対して、如何に忠実な友情を保ち続けた

かは知られている。マンデスは彼のデヴューを促進し、彼がパリに定住するのを手助けした。——カチュール・マンデス『詩集』、第一シリーズは、1876年5月4日、サンドーズ&フィッシュバッカー社から刊行された。『フィロメラ、叙情詩の書』は1863年に、ブラックモンの美しいエッチング付きでヘツツェル社より刊行されていた。『エスペリユス、スウェーデンボルグの詩』はギュスターヴ・ドレの挿絵付きで、『叙事詩的物語』は、1872年に、愛書家書房より出ている。これら最後の2つは、320部限定であった。『真夜中の太陽』は1876年の『現代高踏派詩集』第3巻の259～278頁に載った。

9. 1875年11月13日 —— 1875年11月20日

芸術ゴシップ¹⁾

Ⅲ 画を描く人なら世界中誰でも、パリでは手にも目にもかくも生き生きとしているが、実物よりも一目で見易い木炭画に支配されている。アロンジェの作品は、原画であれ写真製版凹版画による複製であれ、多くの展覧会で美術愛好家たちにこの趣味を吹き込み、彼らはそのあと彼から口頭で助言を受ける²⁾。最も熱心な弟子の一人で、今は教師をしているカール・ロベール氏は、木炭画の方法を全て、少し前に師の手ほどきによって刷新されたように要約しようとしている。手本の図解の数ページを、ロンドンのルシュティエ氏とバルベス氏がイギリス向けに翻訳させることを考えている³⁾。

- 1) 『アシニアム』1875年11月20日土曜日、「芸術ゴシップ」、p.679を見よ。英文テキスト、後出、p. 87.
- 2) オーギュスト・アロンジェ (1832-1898) 風景画家にして木炭画家、ブルターニュとフォンテーヌブローの画家。しかしとりわけ、その見事な木炭画で知られており、『木炭画』、パリ、G. ムスニエ、1873年を刊行。
- 3) カール・ロベールはジョルジュ・ムスニエの偽名。異なる芸術に関する教科書を多数出版したが、その中の幾つかは木炭画を扱ったものである。『自習木炭画——木炭画による風景習作に関する実践的完全概論』、パリ、ムスニエ、1874年、in-8°、94p. —— 『風景木炭画などの初歩講義——アロンジェ氏、アピアン氏、ララーヌ氏らの講義と作品のための予備的習作用——テキストと実践授業』、パリ、ムスニエ、1876年、in-8°、30p. —— 『A. アロンジェの風景画講義のモデル用の木炭画実践授業』、パリ、ゲーベル、1876年、in-8°、Ⅷ-96p. 図解付。

10. 1875年11月13日 掲載されず

芝居ゴシップ¹⁾

『イタリア詩集』を刊行した、『喚起^{ラベル}』誌のブレモン氏²⁾と、『幻想』の著者の一人で、『中腹で』の著者、『シャリヴァリ』紙のレオン・ヴァラド氏³⁾は、共作で『ロゼットの恋人たち』を仕上げたばかりである。そのうちの1幕は得も言われぬ幻想的な韻文で、時々コメディ・フランセーズで上演されている。



Ⅲ 文学者たちと〈芸術〉界を魅了した後、ロッシ⁴⁾は今や、パリで語の厳密な意味で売れっ子である。彼の最初の連続公演は、専らシェイクスピアものだったが、社交界の聴衆をこの偉大な悲劇役者に引き付ける結果となったのは、かつてフレデリック・ルメートルのためにアレクサンドル・デュマ〔・ペール〕が創作したキーンの役だった。ロッシはイギリスの詩作品のレパートリーから長い期間離れるわけではない。というのは、『マクベス』、『コリオラヌス』そして『ヴェニス商人』によってイギリス作品に戻った後、彼はフランスの舞台では未知の驚異である、バイロンの『サルダナパルス』を初めて演じることになるからだ。こうして、恐らく冬の初めのそれと同様に際立った勝利と大喝采の2度目の連続となる。最後に、この見事なシーズンの終わりに当たって、アルフィエリの『オレステス』をお知らせしよう。これは、他の幾つかと共に、将来ここに取り上げるべきメモの主題になり得る遠い予言である。

- 1) ロッシに関する断章は『アシニアム』1875年11月20日土曜日、「芸術ゴシップ」欄、p.683-684に載った。英文テキスト、後出、p. 87。ブレモンとヴァラドに関するメモは掲載されなかった。
- 2) エミール・ブレモンことレオン・プティディディエ (1839-1927) は、批評家、劇作家にして詩人。『文学芸術復興』誌の発行人、編集長。彼の作品『イタリア詩集』は1870年にルメール社から刊行された。
- 3) レオン・ヴァラド (1841-1884) マイナーな高踏派。彼の作品『中腹で』は

1873年に刊行された。しかし、1866年にA. フォール社から刊行された、詩集『幻想』には関わらなかった。これはアルベール・メラ独りの作品である（マラルメ『書簡集、1862-1871』、p.213-214, 359を見よ）。マラルメは、恐らく別の作品、レオン・ヴァラドとアルベール・メラによる、フォール社から1863年に刊行された『4月、5月、6月、ソネット』のことを考えていたのだろう。『ロゼットの恋人たち』は、1889年になってからルメールから刊行された韻文一幕喜劇『最も強くないものの理屈』の副題である。『文芸共和国』に寄稿することになる。

- 4) エルネスト・ロッシ（1827-1896）とりわけシェイクスピアの役に取り組んだ有名なイタリアの悲劇俳優。フランス、ドイツ、ロシアで最も成功した。マラルメの努力にも拘らず、イギリスは彼に批判的なままで、彼のシェイクスピア解釈の仕方を認めなかった。
- 5) ヴィクトル・アルフィエリ（1749-1803）。イタリアの最も偉大な悲劇詩人。20ほどの悲劇と6つの喜劇の著者。彼の『オレステス』は1776年の作品である。

訳者後記

本稿は、マラルメのフランス語原稿の翻訳の続き、第2回である。
底本にしたテキストは以下の通りである。

1. Mallarmé, *Œuvres complètes*, II, Édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2003, pp. 416-440, 1698-1702. [今回訳出したのは、pp. 421-425, 1699-1700.]
2. *Les gossips* de Mallarmé, *Athenaeum* 1875-1876, textes inédits, présentés et annotés par Henri Mondor et Lloyd James Austin, Paris : Gallimard, 1962, pp. 19-75. [今回訳出したのは、pp. 29-37.]

体裁は、前稿を踏襲している。1の新プレイアード版全集による新たな原稿の発掘は、本稿の中にはない。

今回も、読者各位には原文を片手に検証していただき、誤りの指摘やさらなる詳細を寄せていただくことを期待したい。そのために、各項目の註1)に記したフランス語、英語のテキストページは、底本2の記載ページをそのまま記してある。